

正課体育「剣道」受講学生における 剣道に対するイメージについて

○木原資裕, 今井三郎

A Study on the Image of KENDO of students taking "KENDO" Class

Kihara Motohiro, and Saburou Imai

Abstract

The purpose of this study was to describe the image of KENDO of students taking "KENDO" class, comparing the students of "KENDO" class with the students belonging to the KENDO-Club, and comparing long absentee with nonabsentee.

A questionnaire was conducted on Nov. 1982. The results were summarized as follows:

- 1) The common image of KENDO in students of "KENDO" class and students belonging to the KENDO-Club could be inferred from the following terms: courteous, spiritual, traditional, concentrated, serious, prompt, severe, sharp.
- 2) There was significant difference in the image of KENDO between the students of "KENDO" class and the students belonging to the KENDO-Club. This difference seemed to be caused by economical factor, career of KENDO, quantity of exercise, fulfillment of needs, and human relations in the club.
- 3) There was significant difference in the image of KENDO between a long absentee and a nonabsentee. This difference seemed to be caused by the physiological disgust and bad image evoked by being hit on the head of the long absentee, and the enhancement in career and attitude of the nonabsentee.

I 緒言

ある対象に対して、人々がどのような行動をとるかは、その対象に対して、その人がどのようなイメージをもっているかに強く依存することは、日常の様々な経験においても、

また、各種の科学的研究によっても、¹⁾¹⁸⁾¹⁹⁾明らかである。

イメージという言葉の概念については、心理学の分野においては、幻覚(hallucination)・直観像(eidetic image)・残像(afterimage)・

記憶心像 (memory image)・身体像 (body image) 等々の多様な準知覚的な内部過程を総称する概念として使用されている。¹²⁾また、本研究においても、直感的・感情的な印象や記憶などによって、各個人によって形成された心理的な意味を指して“イメージ”という言葉を使用することにする。³⁾¹²⁾

これまで、武道に関するイメージ・意識調査は、武道種目各分野において行なわれている。⁸⁾¹⁷⁾特に、第12回日本武道学会(昭和54年9月)において「武道の特性と指導上の問題点について」というテーマでシンポジウムが開催され、その中で船越⁹⁾は現代人の意識から武道がどのように捉えられているかということ、因子分析による手法を用いて論じている。さらに、杉江¹⁴⁾は船越の成果を踏えつつ、以下の2点を指導者における努力目標として強調している。

- ・ 武道の特性を武道内集団独自の価値認識のみによって理解するばかりでなく、一般の人々が武道に対して抱いている素朴なまた漠然とした、あこがれや不安についてよく知らなければならないこと。
- ・ 武道のよさは、武道をする者にしか解かるはずがないと門戸を閉ざすことなく安心して武道の実践が出来る場を提供すること。

ここに筆者は、船越や杉江の示した視点から、剣道に対するあこがれや不安をイメージとの関連で捉える研究として、実際の体育授業の場で、学生にどのように剣道のイメージが捉えられているかという実証的データの蓄積が必要であると考えた。また、そのことが、武道を安心して実践できる場を提供することに、発展的につながると思われる。

したがって、本研究では、以上のような諸点を念頭におきつつ、正課体育「剣道」受講学生における剣道に対するイメージを、大学剣道部員との比較、および、受講学生における授業に欠席回数の多い者と全出席の者との

比較といった観点から明らかにしようとするものである。

II 研究の方法

1. 調査用紙の作成

調査用紙作成のために、第12回武道学会シンポジウムにおける船越正康の資料および、加藤⁷⁾・我妻ら²⁾の文献にみられる形容詞を収集し、相互に重複するものが多義的なものを除くといった基準によって吟味、整理し、47項目を選んだ。

回答の方法は、47項目それぞれについて剣道のイメージとして、あてはまるものに○、どちらともいえないものに△、あてはまらないものに×——の印をつけ、さらに○印のうち、最も剣道のイメージをあらわしていると考えられるものを三つ選ぶという手続きであった。

2. 調査対象および調査の実施

調査対象としては、筑波大学における正課体育「剣道」受講学生126名、および全日本学生剣道連盟所属の剣道部員(四段)48名を選んだ。受講学生に対しては、昭和57年11月に調査を実施した。剣道部員に対しては、昭和56年10月に、木原・吉村¹⁷⁾が全国の大学剣道部員564名に対して行なった同様の調査のうちから、四段の者のみを取り出し、整理したものである。

III 結果と考察

4段階の自己評定尺度による結果を、もっともあてはまる——に4点、あてはまるに——3点、どちらともいえない——2点、あてはまらない——に1点を与え、平均値および標準偏差を算出した。その結果により、以下にあげる視点から考察を加えた。

1. 正課体育受講学生と剣道部学生(四段)におけるプロフィールの比較

図1は、正課体育受講学生と剣道部学生(四段)とのプロフィールの比較であるが、図中

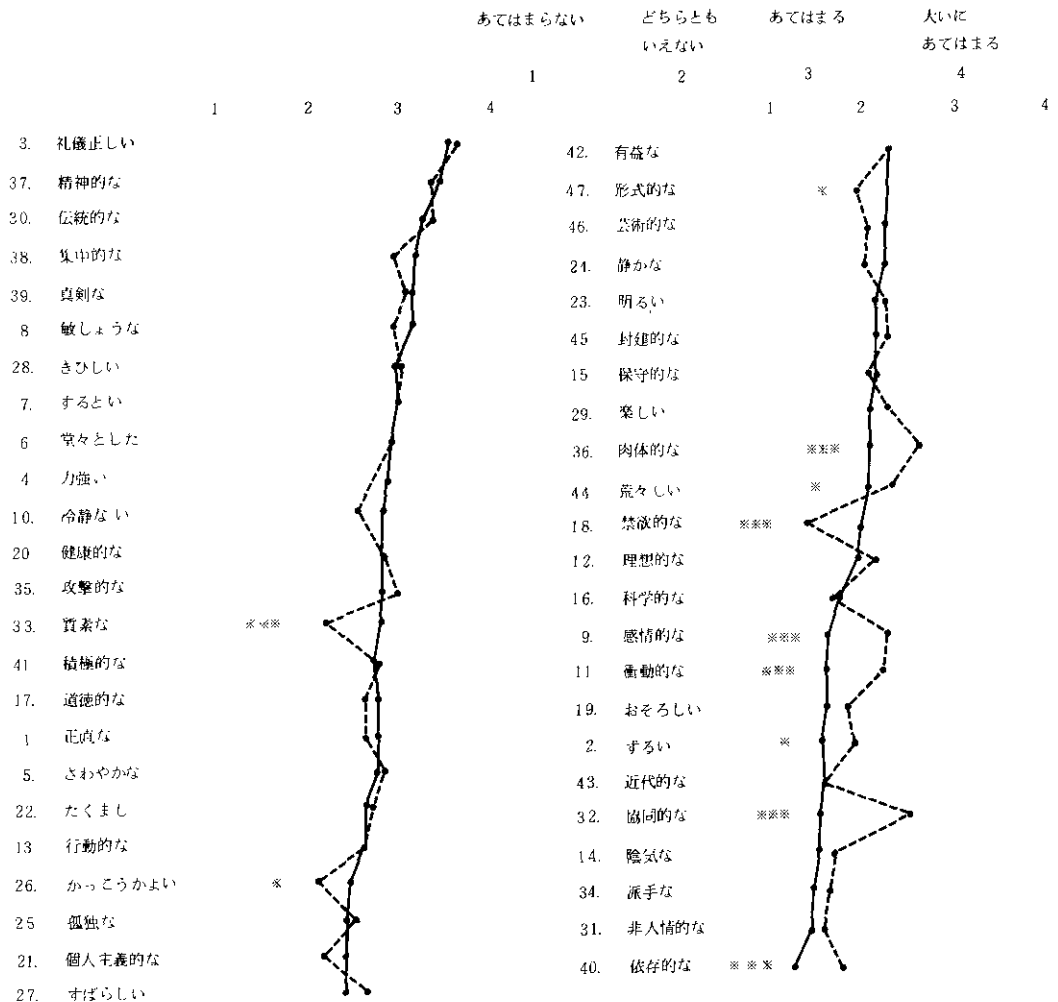


図1. 正課体育受講生と剣道部学生(四段)におけるプロフィールの比較

— 共通体育受講生
 - - - 剣道部学生(四段)
 ***: P < 0.001
 *: P = 0.05

の左より, ③礼儀正しい・③⑦精神的な・③⑩伝統的な・③⑧集中的な・③⑨真剣な・⑧敏しょうな・②⑧きびしい・⑦するどい——といった項目においては, 正課体育受講生は剣道部学生(四段)とほとんど, かわりなく約3.0以上の値を示している。又, これらの項目に対して「あてはまらない」と答えた学生は, 174

名中, ③礼儀正しい——1名・③⑦精神的な——0名・③⑩伝統的な——2名・③⑧集中的な——1名・③⑨真剣な——0名・⑧敏しょうな——2名・②⑧きびしい——1名・⑦するどい——3名であった。これらのことから, 上記に示した項目は, 大学において剣道を行なっているほとんどの者が, 共通にもつ剣道に対

するイメージであるといってもいいであろう。

正課体育受講学生と剣道部学生（四段）が示す値に有意差が見られる項目が以下のようにある。

⑬質素な・⑭かっこうがよい・⑮形式的な——という視覚的イメージを表わすと思われる項目においては、剣道部学生（四段）の方がより低い値を示している。このことは、たとえば「質素な」においては剣道防具・竹刀・剣道着・袴等々に剣道部学生がかかる経費という経済的な側面を考えれば、「質素な」といえないのは、当然であるかもしれない。又、「かっこうがよい」「形式的な」においても、主に運動経験の長さによって、視覚的イメージが変化してくることは十分推察できよう。

⑯肉体的な・⑰荒々しい——という動的なイメージを表わすと思われる項目においては、剣道部学生の方がより高い値を示している。四段の剣道部学生はほとんど1週間に6回ないし7回、2時間以上の練習を行っており、1週間に1回、1時間15分の授業で練習する受講学生とは、運動量において格段の差があり、この運動量の差が動的イメージの差となってあらわれていると考えられよう。

⑱禁欲的な・⑲感情的な・⑳衝動的な——という内的欲求のイメージを表わすと思われる項目にも有意な差がみられる。「禁欲的な」に関しては、剣道部学生の方がより低い値を示している。このことは、裏をかえせば剣道部学生には、剣道において自己の欲求を満たす面が多々あるといえよう。さらに、「感情的な」「衝動的な」において剣道部学生の方がより高い値を示していることを考えれば、剣道部学生は剣道において、自己の内的欲求を充足する傾向にあるといえよう。これらの欲求充足に関しては、運動経験の長さ、運動量といった自己の生活の中で占める剣道の割合とのかわりが大きいことは十分推察できる。

㉑協同的な・㉒依存的な——といった剣道

のもつ人的イメージを表わすと思われる項目に、剣道部学生の方がより高い値を示している。大学生において四段の段位を取得するには、それまでに10年以上の経験が必要であり、大学レベルの剣道の実力においては、トップクラスにあるといえよう。また、剣道部という凝集性の強い運動部の中で、四段の者が中心的な役割を果たしていることは想像できよう。このことから、部活動運営のための部員との協同的活動や先輩・後輩という関係や監督・コーチとのかわり、「協同的な」「依存的な」側面が、正課体育受講学生よりも強くなっているといえよう。

以上のように、剣道部学生（四段）と正課体育受講学生が示す値に有意差が見られる項目において、その有意差の原因については、剣道部とのかわりのある指導者においては、剣道部学生の剣道に対するイメージ＝受講学生の剣道に対するイメージと捉える危険性が十分存在するのではないかという点である。つまり、指導者が描く剣道のイメージとまったくちがったイメージを受講学生がもっている場合が往々にして存在するということを認識しなくてはならないということである。たとえば、剣道の授業に対する自由記述の中に、「いたい」「ずしんとくる」「相手の面をおもいきって打てない」等の若干の記述があり、肉体的苦痛とあいまって、自己の内的欲求が満たされていない状態にある学生が存在している。その問題解決のためにも、その学生の存在認識をまずもつことが必要であり、そこから様々な試行錯誤がなされなければならない。

2. 正課体育受講学生における欠席回数から見た剣道に対するイメージの比較

調査実施までに、正課体育「剣道」の授業は17回行なわれており、その出席状況を図2のように示した。この図により、全体の約8割の者は欠席回数3回以内であり、皆勤の学

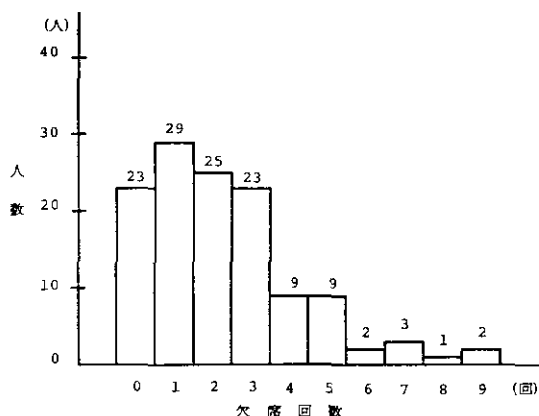


図2. 正課体育「剣道」における出席状況

生も23名(18.3%)いることがわかる。このことから、筑波大学生の気まじめな一面をうかがうことができよう。しかし、ここでは、欠席回数7回以上の学生の剣道に対するイメージに焦点をあてて、考察することにする。欠席回数7回以上の学生のうち1名A(男)を選び、その調査項目に示す値を図3に示した。また、比較検討のため、欠席回数0回の学生のうち1名B(男)を選び、同様に図3に示した。

正課体育受講学生の全体平均が高い項目である図3左上の③礼儀正しい・⑦精神的な・⑩伝統的な・⑫集中的な・⑬真剣な・⑮きびしい・⑯堂々とした・⑳力強い・㉑冷静な——においては、A・Bともに3以上の値を示している。このことは、前項で考察した四段の剣道部学生と受講学生が示す関係と類似しており、A・B二人における剣道に対する共通の「あてはまる」イメージといえよう。又、受講学生の全体平均が低い項目である図3右下の⑳協同的な・㉒陰気な・㉓派手な・㉔非人情な・㉕依存的な——においては、A・Bともに同じ値を示しており、A・Bにおける剣道に対する「あてはまらない」イメージといえよう。

A—B間において、「大いにあてはまる」または「あてはまる」——「あてはまらない」の

関係にある項目としては、④封建的な・⑨おそろしい・⑪形式的な・⑬近代的な——がある。又、逆に、A—B間において「あてはまらない」——「あてはまる」の関係にある項目として、①正直な・⑤さわやかな・②たくましい・⑥個人主義的な・③明るい・⑧科学的な——がある。

このようなイメージの差がどのようなことからおこるのであろうか。

Aは剣道の授業に対する自由記述の中で、「頭をたたかれるのは非常に怖い」と書いている。Aにおいては、前述したように「陰気な」「非人情な」という感情はもっていないが、「頭をたたかれる」——「怖い」という生理的嫌悪感がAに存在しているように思われる。又、授業においてAは、自己の剣道に対するイメージと一致する行動をとり、そのイメージをますます強化する経験を繰り返している傾向にあると思える。たとえば、Aが面を打たれる場面において、力のある者と練習をする際、必ずといっていいほど首をまげ、頭を下げている。この動作により、さらに面を打たれる衝撃が強くなっている。「頭を打たれる」——「怖い」——「強い衝撃」——「剣道に対するイメージ」という連想的過程がAの意識の中に成立していると考えられる。

一方、Bに関して、筑波大学体育センターが昭和56年6月に実施した「正課体育における種目選択に関する調査」¹⁶⁾と同様の調査を昭和57年4月にBのクラスにおいて実施しており、その調査資料の中心から、Bの受講動機として次の事柄を指摘することができる。

- ・以前にその経験があった(高校時代)。
- ・自分の能力・体力を向上させたい。
- ・その種目の試合をしてみたい。
- ・自分の性格にあっている。
- ・オリエンテーションの際、第1希望種目であった。

これらのことから、Bは高校時代から剣道

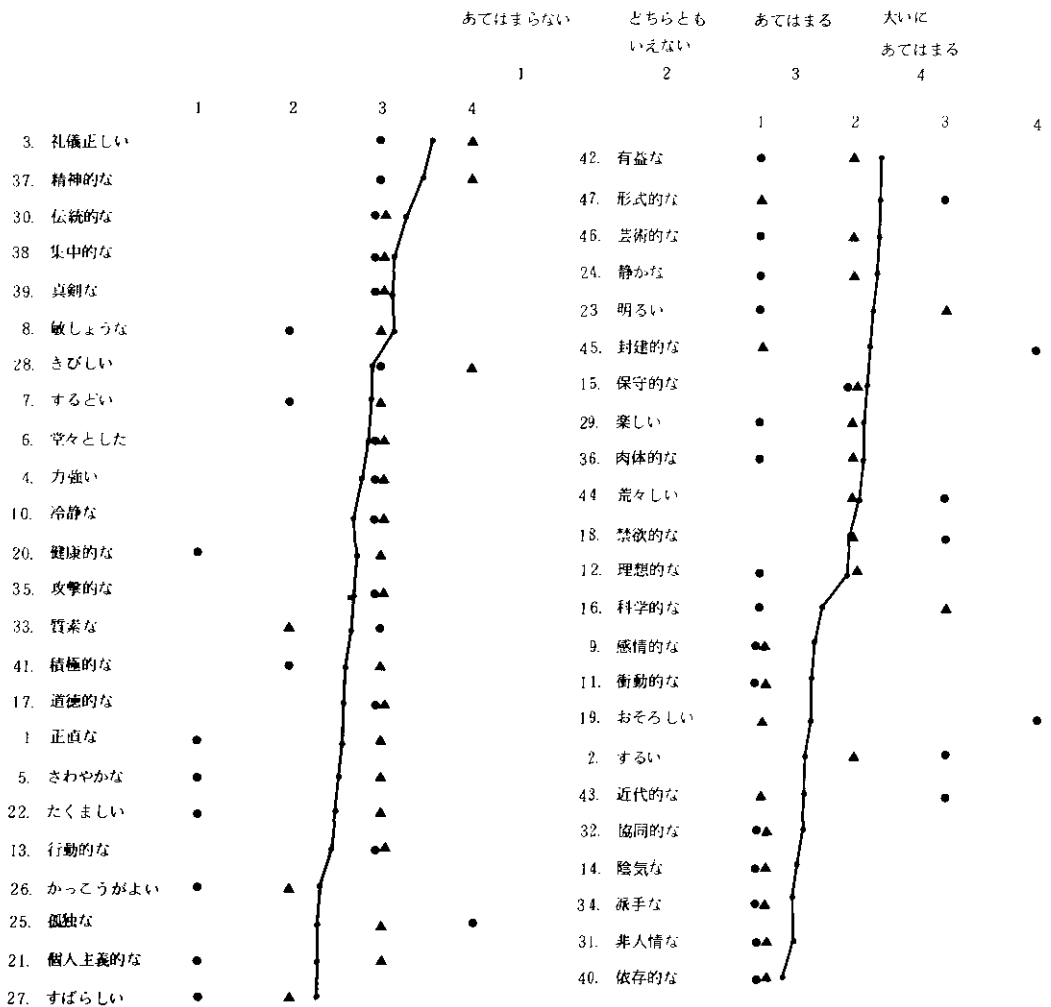


図 3. 欠席回数から見た剣道に対するイメージの比較

● A (男, 欠席回数 7 回)
▲ B (男, 欠席回数 0 回)
— 受講生平均値

の経験があり、その経験を通して大学の授業において初めて剣道と関わりをもつものよりはやく、筋感覚的な経験のともなう剣道に対するイメージをもっていたといえよう。

又、Bはそのイメージに基づき、大学の「剣道」の授業においてどのような態度をとり、何を期待するかが、すでに自己の内に決定さ

れていたと考えられる。このBにおける剣道に対するイメージおよび態度は、授業を展開する上で、指導者に大いにより印象を与えている。又、逆に、指導者がBについて特定のよいイメージや観念を持つようになり、そのイメージや観念は、くりかえし色々な形でBに伝えられ、やがて、Bの内部にとり入れら

れて、Bの剣道に対するイメージの強化につながると考えられる。事実Bは、指導者にすすめられ、昇段試験(初段)を受験する決意をし、その手続きを行い、昭和58年2月に合格している。

以上のような、Aにおける生理的嫌悪感・頭を打たれることによる連想的過程やBにおける経験や態度による剣道に対するイメージの強化によって、A-B間のイメージの差が生じてきたと考えられよう。

IV 結 語

正課体育「剣道」の授業において、受講生が剣道に対して、どのようなイメージをもっているかによって、その行動や態度に差があらわれることは明らかである。

本研究では、正課体育受講生における剣道に対するイメージを大学剣道部員との比較、および、授業欠席回数といった観点から捉えようとした。

図1に示したように、礼儀正しい・精神的な・伝統的な・集中的な・真剣な・敏しょうな・きびしい・するどい——といった項目には、正課体育受講生と剣道部学生とが共通にもつ剣道に対するイメージがあらわれているといえよう。

又、正課体育受講生と剣道部学生が示す値に有意差が見られる項目があり、それらは用具等における経済的側面・運動経験の長さ・運動量・欲求充足度・人間関係——といった要因がからみあい、その差があらわれたものと考えられる。ここにおいて、指導者が描く剣道のイメージとまったくちがったイメージを受講生が描く場合が往々にしてあることを十分認識しなくてはならない。

正課体育受講生における欠席回数7回以上の学生Aと皆勤の学生Bを比較した場合、Aにおける生理的嫌悪感・頭を打たれることによる連想的過程やBにおける経験や態度による剣道に対するイメージの強化によって、

A-B間のイメージの差が生じている。

人間は誰しも、自分が誰であり、どのような特徴を持ち、何を経験し、どのような将来の見込みと希望をもつかという観念なり、考えを持っているといわれている。²⁾正課体育「剣道」の受講生においても、それまでの経験・自己の性格・授業への期待等によって、その剣道に対するイメージに差があらわれている。ここでは、学生Aのようなイメージが、剣道に対する偏見とならぬように、様々な工夫と試行錯誤が必要であろう。

本研究では、受講生の剣道に対するイメージを筑波大学および特定の指導者のもとでの授業といったわく組みの中のみで判断しており、それらの受講生をとりまく環境が変化すれば、そのイメージも変化してくることは十分想像できる。今後の課題として、これらの点をふまえつつ、さらに、イメージについての研究を深めていきたいと考えている。

<参考文献>

- 1) 鮑戸 弘, イメージの心理学, 潮新書, 1970.
- 2) 我妻 洋・米山後直, 偏見の構造, 日本放送出版協会, 1980.
- 3) 東 洋・大山 正, 心理用語の基礎知識, 有斐閣, 1976.
- 4) 船越正康, 現代武道観研究の立場から, 武道学研究 12-1, 1980.
- 5) 藤岡喜愛, イメージと人間, 日本放送出版協会, 1974.
- 6) 藤岡喜愛, 徳田良仁, 飯坂良明, イメージ・情報・宗教, 学研, 1978.
- 7) 加藤隆勝, 青年期における自己意識の構造, 心理学モノグラフNo.14, 東京大学出版会, 1977.
- 8) 河崎武夫, 他, 柔道に対するイメージ調査, 武道学研究 8-2, 1976.
- 9) 成瀬悟策, イメージ, 誠信書房, 1974.
- 10) 佐伯 胖, イメージ化による知識と学習, 東洋館出版社, 1982.

- 11) 杉江正敏「武道のよさを格技指導にどう生かすか」格技指導の問題とその解決, 学校体育 34-2, 1981.
- 12) 杉原 隆, 「運動学習と運動のイメージ」, 運動のイメージづくりをめざす指導法, 女子体育, 1976-12.
- 13) 新体育, 運動イメージ, 1977-10.
- 14) 体育の科学, 運動とイメージ, 1980-6.
- 15) 田中靖政, 意味の測定と情緒的意味体系に関する諸研究, 心理学評論 8-12, 1964.
- 16) 筑波大学体育センター, 大学体育研究第 4 号, 1982, PP.113-130.
- 17) 吉村真紀, 女子剣道の実態と意識に関する一考察——男女の剣道に対する意識調査を中心として——, 筑波大学体育専門学群卒業論文, 1981.
- 18) 頭川昭子, 松浦義行, 意味空間における舞踊のイメージ——舞踊における音の効果——, 筑波大学体育科学系紀要第 4 巻, 1981. PP 41-48.
- 19) 頭川昭子, 松浦義行, 意味空間における舞踊のイメージ——ダンスパフォーマンスにおける集団の大きさ——, 筑波大学体育科学系紀要第 5 巻, 1982, PP.37-46.